

【書評】

中川辰洋『カンティヨン経済理論研究』

日本経済評論社，2016年，298頁

本書は、著者が「18世紀における経済学の古典形成におけるキーパーソン」(287)と考えるロー、カンティロン(著者の表記ではカンティヨン)、チュルゴ(同じくテュルギー)に関する著者の研究書「3部作」の最後となる著作であり、カンティロンに関する研究書としてはわが国で初めてのものでもある。序章「課題と視角」、第1章「カンティヨンの生涯と作品」、第2章「カンティヨンの経済理論と『商業試論』」、第3章「『商業試論』の諸問題」、終章からなる本体部分(ここまでで147頁)と、長大な二つの付論から成っている。

「あとがき」によれば、著者は金融・証券論、EU経済論を専門としてきたようであるが、そのせいか、とくに日本における従来の学史研究の動向や固定観念から自由である。序章で、学史研究における「スミスへの過度の傾斜」を戒め、「とりわけフランス経済学史研究においてはボワギルベールであろうが、ローやカンティヨンであろうが、ケネーとフィジオクラート派の「先駆的重商主義者」として「二線級」の経済思想、経済学説と位置付けられた」(15)と慨嘆しつつ、「わが国のカンティヨン研究を…欧米の水準へと近づけることを目標としている」(17)と述べている。

重農学派の先駆者としてのカンティロン像を確立したのは、カンティロンを「再発見」したジェヴォンズとヒッグズであったが、しかしカンティロンは他方でプリオニズムをも滲ませながら貿易差額説を展開するなど、重商主義者としての側面を強くもっていた。カ

ンティロン経済学のこの二面性をめぐって多様な解釈がなされてきたが、矛盾をはらみつつ示された彼の「体系」の全体像はそれらの研究を寄せ集めても十分には見えてこない。この点で研究史上に新機軸をもたらしたのが、近年の、カンティロンの生涯を追ったマーフィーの伝記的研究と、『試論』出版の事情にも迫りつつ新たな視点を提示した津田内匠の研究であった。

著者は第1章でマーフィーの研究に依拠して、カンティロンとローとの密接な関係と『試論』全体を貫くロー批判の隠れた意図に触れている。第2章では、同じくマーフィーの整理に基づいて、閉鎖経済と開放経済、物々交換経済と貨幣経済(市場経済)などからなる『商業試論』の複雑な構成を述べた上で、カンティロンの価値論、土地所有者や企業者の役割、さらに「開放経済」下の外国貿易・銀行業務について論じている。第3章では「カンティロンの経済理論の意義と限界を明らかにする」(91)のために、1) スベングレーに依拠して価値・価格論の問題、2) 企業者の問題、3) 銀行・信用論の問題を取り上げている。このうち3)では、「カンティヨンの国立銀行批判は、その創始者ジョン・ローへの批判が主要なテーマである。ただ問題は、カンティヨンの議論がはたしてどこまで本意であったか、というところにある」(124)と疑問を投げかけている。

著者の囚われない研究の視点は正当であるし、またジェヴォンズ以来の欧米の研究、さらに戦前の手塚壽郎の研究などを含めて幅広く研究文献を渉猟しようとする姿勢は本書に

一定の価値を与えている。ただし本書の内容については、評者は数多くの疑問を抱かざるを得なかった。まず研究動向に関して、著者がもっぱら「書誌家」とみなす津田内匠が翻訳に付した、カンティロン経済学の全体像をディリジズムの側面から捉えた画期的な解説論文や、イデオロギッシュな面を持ちつつも委曲を尽くしてカンティロンの体系に挑んだ200頁を越える渡辺輝雄の古典的な労作に対しては、極めて限定的な言及で済まされている。しかしこれらのわが国の代表的な研究への評価あるいは対峙なくして、著者のいうところの、遅れた「わが国のカンティオン研究を…欧米の水準へと近づける」ことなどできないであろう。

また、カンティロンの言説に即した説明が十分でないため、評者には理解が難しい記述が少なからずあった。例えば、第1章で著者はカンティロンを「演繹的論理の手続きに即して現実の経済社会の構造なり運動なりを説明する手法を明示的に示した最初の人物」(53)として高く評価するが、どのような演繹的手法なのか、具体的な説明は見られない。第2章では、著者は彼の地代の源泉はケネーの純生産物にあたと理解した上で、この純生産物は人口増加の基礎であったとするが(73)、どのような意味でそうなのか、説明はなされていない。終章でも、カンティオンは土地が生産に対する唯一の制約条件をなすと考えたが、ケネーはこれを農業への制約条件だと誤解し、あるいはそう読み替えることによって、意図せざる結果として「経済表」を成立させることになった(「瓢箪から駒」と、重要な(?)指摘がなされているが(146)、評者にはまったく理解が及ばなかった。「カンティオンは経済学におけるすべての先行者の後継者であり、経済学を志すすべての人間

たちの先駆者であった」(147)という著者の結論も、それだけではただちに首肯できるものではない。

さらに『商業試論』の読み方についても、評者とは理解が異なる点が目についた。2点だけあげておく。1つは内在価値に関して、著者は「カンティオンのいう市場での諸商品の価格ないし内在価値は、需要と供給によって決定される」(69)とするが、そもそも事前的に生産段階で決まる内在価値(生産費)は、需要と供給の関係で決まる市場価格とは異なって「決して変動しない」(津田訳21)、両者が乖離するとき、そこに利潤機会を見出す企業者の生産調整(土地資源の再配分)の活動によってやがて価格は価値に一致する。カンティロンのこうした市場機構の認識はスミスやイギリス古典派経済学の系譜に連なるものとして高く評価されているが、著者が言うように、「商品の内在価値はその供給サイドだけではなく需要サイドの評価が問題になる」(97)とすれば、この機構の作用はどのようになるだろうか。もう1点、著者は企業者としてカンティロンがおもに想定しているのは、大規模借地農業者(農業資本家的企業者)であったと考えている(ように思える)が(109)、著者も理解しているように、カンティロンの企業者は自己資本を持つ企業者に限定されない。利子は「利潤に基づくもの」としつつ利子・資本利潤の概念を述べていることでよく知られた一節において(津田訳129-30)、カンティロンは貸付資本の存在を前提にして所有と経営の分離の可能性を示しているが、ここにむしろスミスの資本家概念には吸収し得ない彼の企業者概念の独自性をこそ見るべきであろう。

(米田昇平：下関市立大学)